

原著

青年期大学生の親準備性を育む要因の検討

水口由紀子*¹ 中新美保子*² 井上信次*³

要 約

青年期大学生の親準備性の現状とそれを育む要因を明らかにすることを目的に、医療福祉系 A 大学1年生の男女816名を対象に質問紙調査を行った。調査時期は2016年4月～6月、郵送法にて回収した。結果、190名から回答が得られ、以下のことが明らかになった。1) 親準備性の構成要素として、【親になることの意義】【乳児・育児への好意感情】【親になることへの負担感・不安感】【親になることへの要件】【世代の継承】の5因子が抽出された。2) 親準備性を育む要因11項目および教育の記憶やきょうだいの有無は、親準備性構成要素の1～5因子の得点において有意差 ($p<0.05$) や有意差傾向 ($p<0.1$) が認められた。3) 教育の記憶の有無はきょうだいの有無との間で有意差 ($p<0.05$) が認められ、弟や妹がいない人の方が教育の記憶が心に残っていた。以上のことより、親準備性を育む教育を実施すること、およびきょうだいの有無が親準備性を育む要因として重要であることが示唆された。

1. 緒言

自分の子どもができれば誰しもが親となる。親とは、少なくともわが子を愛し、世話をおこない、発達を保障するものである¹⁾。井上と深谷²⁾は「青年期は、近い将来親になろうとしている発達段階として、親準備性を獲得する重要な時期である」と述べている。親準備性については、1982年に岩田ら³⁾によって我が国において初めて概念が示された。それは、「望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期（青年期）における、価値的・心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態」と定義している。

青年期に獲得する親準備性に対する教育⁴⁾については、1989年の学習指導要領の改訂により、中学校は1993年から、高校は1994年から家庭科を男女共修することで学びを達成できるとされた。その中で、白井ら⁵⁾は、男女共修が定着している家庭科授業も、女子の方が役に立つと思う傾向や好きだと思う傾向は強いと報告していた。また伊藤⁶⁾は中高校生の性役割観と親になるための受容性との関連性において男子は子育てに対する授業を「一般的な常識」として捉え、女子は「自分の将来の問題」として捉える傾向が強く、子育てに対して男子が自分自身の問題として捉えない、捉えられない傾向がみられること

を指摘していた。その後、2008年改訂の学習指導要領⁷⁾においては、家庭科の学習として、中学校の教育目標を、「実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な衣食住に関する基礎的な知識と技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。」とし、内容については、「2012年度より中学校で幼児ふれあい学習」が必修化され、体験を通じて生徒が親準備性を身に付ける機会のあるとしている。高校の目標は、「人間の健全な発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。」とし、内容には、「人の一生と家族・家庭、子どもの発達と保育・福祉、高齢者の生活と福祉、生活の科学と文化、消費生活と資源・環境、ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」を設定している。さらに保健体育・道徳・特別教育活動の講演会なども並行して、親準備性の教育を行っている。

そこで母親を支える父親の育児参加が必要不可欠な中、親になることが近い年代だけでなく、その準

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究所 保健看護学専攻

*3 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(連絡先) 水口由紀子 〒704-8116 岡山市東区西大寺中1-9-24

E-mail: chocco_5@yahoo.co.jp

*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科

備段階の青年期における親準備性育成の現状はどのようなものなのであろうか。先行研究では、親になる資質という観点からだけでなく、現代青年自身が親になる意識について様々な実証的研究がされている。例えば親準備性として佐々木⁸⁾は、従来の女性性に限定されていた尺度から青年期男女が使用できる尺度として2つの要素(乳幼児への好意感情9項目、育児への積極性13項目)から構成されている尺度作成をし、服部⁹⁾は、「親になることに対する意識」と定義した5つの要素(親になることの意義12項目、子どもの養育14項目、親になることへの負担感・不安感9項目、親になることへの要件5項目、世代の継承3項目)から成る尺度作成をしていた。また先行研究を概観すると、親準備性を育む要因として、「父親・母親へのイメージ」^{10,11)}「ふれあい体験」^{11,12)}「やさしさ」¹³⁾「恋愛体験」¹⁴⁾「パートナーや家族との信頼関係」^{12,13)}「親になる負担」¹⁵⁾「親になる価値」¹⁵⁾「子どもへの肯定感情」¹²⁾「子どもへの否定感情」¹²⁾「子育てへの認識」¹⁰⁾「母性や父性」¹⁶⁾の11項目が抽出された。しかし学校での教育が親準備性にどのような影響を与えているかの研究は見当たらなかった。そこで、青年期大学生の親準備性の現状と、先行研究から抽出された11項目の親準備性を育む要因および学校での教育の記憶との関連を明らかにし、今後の課題を検討することが必要と考えた。

そこで、本研究は親準備性の教育を受けてきた青年期大学生の親準備性の現状とそれを育む要因を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2.1 研究対象者

医療福祉系 A 大学の3学部(医療福祉学部、医療技術学部、医療福祉マネジメント学部)の大学1年生の男女816名を対象とした。

2.2 方法と期間

無記名自記式質問紙調査を実施した。2016年4月～6月に了承の得られた講義終了後に研究の主旨を説明し配布した。回答後は厳封したのち郵送にて返却するよう依頼した。

質問紙の構成は、以下の3種類で構成した。

- 1) 対象者の属性：性別、年齢、学部、家族構成
- 2) 親準備性について：佐々木⁸⁾の親性準備性尺度の2要素22項目と、服部⁹⁾の親準備性尺度4要素(子どもの養育を除く)29項目の合計51項目を使用し、親準備性を測定した。質問項目の回答は「非常にそうだ」～「全くそうでない」の4件法とし、4点から1点を配した。
- 3) 親準備性を育む要因：(1) 親準備性を育む要因

11項目、(2) 教育の記憶の有無

2.3 分析方法

対象者の属性、親準備性について、親準備性を育む要因11項目および教育の記憶の有無の単純集計を行った。次に、親準備性については因子分析(最尤法・プロマックス回転)し、構成要素(各因子)を抽出した。抽出された各因子の因子得点と親準備性を育む要因11項目および教育の記憶や属性との関連については t 検定を行った。教育の記憶と属性との関連については χ^2 検定を行った。有意水準は5%未満を有意差ありとし、10%未満を有意差傾向ありとした。分析は統計ソフト IBM SPSS Statistics22を使用し、全てを有効回答として分析を行った。一部の無回答については分析数が制限されるため、ペアワイズによる欠損値の除去の対応をとった。そのため分析によって n 数は異なっている。

2.4 倫理的配慮

川崎医療福祉大学倫理委員会(承認番号15-094)の承認を得て行った。調査への協力は自由意志にもとづき、回答しなくても不利益を受けることはないこと、結果は統計的に処理し個人が特定されることはないこと、質問紙およびデータの管理は厳重に行うことを研究依頼文に明記し、研究者に質問紙が返送されたことをもって同意とみなした。

3. 結果

質問紙の配布人数は816名であり、その内190名(23.3%)から回答を得た。全てを有効回答票として分析を行った。

3.1 対象者の属性(表1)

対象者の性別は、男性26名(13.7%)、女性162名(85.3%)であり、女性が多い集団であった。年齢は18歳156名(82.1%)、19歳29名(15.3%)、20歳3名(1.6%)と18歳が多くを占め、在籍している学部は、医療福祉学部76名(40.0%)、医療技術学部90名(47.4%)、医療福祉マネジメント学部22名(11.6%)であった。家族構成は、同居家族が、父親169名(88.9%)、母親183名(96.3%)、きょうだい(兄・姉)83名(43.7%)、きょうだい(弟・妹)106名(55.8%)、祖父母49名(25.8%)、その他11名(5.8%)であった。

3.2 親準備性を育む要因

3.2.1 親準備性を育む要因11項目について(表2)

親準備性を育む要因について肯定的回答が多かった項目は、[今まで乳幼児とふれ合う機会があった(n=183)]は、はい158名(86.3%)、いいえ25名(13.7%)、[恋愛経験がある(n=184)]は、はい135名(73.4%)、いいえ49名(26.6%)、[自分には母性や父性がある

表1 対象者（医療福祉系 A 大学1年生）の属性

属性		人 (%)
性別	男性	26 (13.7)
	女性	162 (85.3)
	無回答	2 (1.1)
年齢	18歳	156 (82.1)
	19歳	29 (15.3)
	20歳	3 (1.6)
	無回答	2 (1.1)
学部	医療福祉学部	76 (40.0)
	医療技術学部	90 (47.4)
	医療福祉マネジメント学部	22 (11.6)
	無回答	2 (1.1)
家族構成	父親	169 (88.9)
	母親	183 (96.3)
	きょうだい（兄・姉）	83 (43.7)
	きょうだい（弟・妹）	106 (55.8)
	祖父母	49 (25.8)
	その他	11 (5.8)
	無回答	2 (1.1)
家族の就労状況	父親が就労	172 (90.5)
	母親が就労	154 (81.1)
	母親は専業主婦	23 (12.1)
	その他	11 (5.8)
	無回答	3 (1.6)

表2 親準備性を育む要因の質問項目の人数分布

項目内容	n	人(%)	
		はい	いいえ
自分の親に対するイメージは良い	183	167 (91.3)	16 (8.7)
今まで乳幼児とふれ合う機会があった	183	158 (86.3)	25 (13.7)
自分はやさしい、あるいはやさしくありたい	182	173 (95.1)	9 (4.9)
恋愛経験がある	184	135 (73.4)	49 (26.6)
家族との信頼関係が形成されている	183	172 (94.0)	11 (6.0)
「親になること」の価値を考えることがある	183	140 (76.5)	43 (23.5)
「親になること」の負担を考えることがある	184	159 (86.4)	25 (13.6)
子どもに対して肯定的感情がある	184	176 (95.7)	8 (4.3)
子どもに対して否定的感情がある	183	60 (32.8)	123 (67.2)
自分が子育てをすることを考えたことがある	184	144 (78.3)	40 (21.7)
自分には母性や父性があると思う	183	140 (76.5)	43 (23.5)

と思う (n=183) は、はい140名 (76.5%)、いいえ43名 (23.5%) であった。他の8項目についても肯定的な回答が7~8割であった。

3.2.2 教育の記憶について

教育の記憶についての質問として、「親になることについて」に関連した授業を受けた (n=188) は、はい122名 (64.9%)、いいえ66名 (35.1%) であった (表3)。さらに、はいと答えた回答者に対する質問として、「親になることについて」に関連した授業は心に残っている (n=121) は、はい86名 (71.1%)、いいえ35名 (28.9%)、「親になることについて」に関連した授業は役に立ったと思う (n=119) は、

はい102名 (85.7%)、いいえ17名 (14.3%) であった (表4)。

3.3 親準備性の各因子の抽出

親準備性を因子分析した結果を表5に示した。共通性が0.40未満の項目を除外し、因子負荷量の絶対最大値が0.40未満と複数に0.40以上負荷している項目を除いた結果、30項目、5因子が抽出された。第1因子は12項目で構成されており、「自分自身も成長する機会」など、親になることへの意義をあらわす内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで【親になることの意義】因子と命名した。第2因子は8項目で構成されており、「赤ちゃんと一緒に遊ぶこと

表3 教育の記憶についての質問項目の人数分布

項目内容	n	はい	いいえ
		人(%)	人(%)
小学校・中学校・高校で、 「親になることについて」の関連授業を受けた	188	122 (64.9)	66 (35.1)

表4 教育の記憶の人数分布

項目内容	n	はい	いいえ
		人(%)	人(%)
心に残っている	121	86 (71.1)	35 (28.9)
役に立ったと思う	119	102 (85.7)	17 (14.3)

が好き] など、乳児への好意感情に意識が向かう内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで【乳児・育児への好意感情】因子と命名した。第3因子は4項目で構成されており、[心身の実質的負担を被る] など親になることへの負担感や不安感をあらわす内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで【親になることへの負担感・不安感】因子と命名した。第4因子は3項目で構成されており、[常識をもち、世間を知ることが必要] など親になるための要件をあらわす項目が高い負荷量を示していた。そこで【親になることへの要件】因子と命名した。第5因子は3項目で構成されており、[自分の子孫を残すこと] など世代を継承することをあらわす内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで【世代の継承】因子と命名した。

次に因子の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出した。結果全体では0.940、第1因子の【親になることの意義】0.951、第2因子の【乳児・育児への好意感情】0.935、第3因子の【親になることへの負担感・不安感】0.839、第4因子の【親になることへの要件】0.868、第5因子の【世代の継承】0.862と、高い内的整合性が確認された。

3.4 親準備性を育む要因と親準備性の各因子との関連

3.4.1 親準備性を育む要因11項目と親準備性の各因子の因子得点との関連(t検定)(表6)

親準備性を育む要因と因子得点をt検定した結果、全ての項目において、有意差や有意差傾向を示していた。その中で、[今まで乳幼児とふれ合う機会があった]には、【親になることの意義】因子と【乳児・育児への好意感情】因子では有意差があり($p<0.05$)、はいと答えた人の方が高い得点を示していた。【親になることへの要件】因子には有意差

傾向があり($p<0.1$)、はいと答えた人の方が高い得点を示す傾向があった。同様に[恋愛経験がある]には、【親になることの意義】因子と【乳児・育児への好意感情】因子と【親になることへの負担感・不安感】因子には有意差傾向があり($p<0.1$)、はいと答えた人の方が高い得点を示す傾向があった。

【親になることへの要件】因子には有意差があり($p<0.05$)、はいと答えた人の方が高い得点を示していた。[自分には母性や父性があると思う]には、【親になることの意義】因子と【乳児・育児への好意感情】因子と【親になることへの負担感・不安感】因子、【親になることへの要件】因子には有意差があり($p<0.05$)、はいと答えた人の方が高い得点を示していた。【世代の継承】因子には有意差傾向があり($p<0.1$)、はいと答えた人の方が高い得点を示す傾向があった。

3.4.2 教育の記憶と親準備性の各因子の因子得点との関連(t検定)(表7)

教育の記憶と因子得点をt検定した結果、[「親になることについて」に関連した授業は心に残っている]には、【親になることの意義】因子と【乳児・育児への好意感情】因子では有意差があり($p<0.05$)、はいと答えた人の方が高い得点を示していた。同様に[「親になることについて」に関連した授業が役に立ったと思う]には、【親になることの意義】因子と【乳児・育児への好意感情】因子では有意差があり($p<0.05$)、はいと答えた人の方が高い得点を示していた。

3.4.3 きょうだいの有無と親準備性の各因子の因子得点との関連(t検定)(表8)

きょうだいの有無と因子得点をt検定した結果、【親になることの意義】因子では有意差があり($p<0.05$)、きょうだい(兄・姉)がいない人の方が高い得点を示していた。【乳児・育児への好意感情】

因子には有意差傾向があり ($p < 0.1$), きょうだい(兄・姉)がいない人の方が高い得点を示す傾向があった。同様に, きょうだい(弟・妹)がいる人は, 【親になることの意義】因子と【乳児・育児への好意感情】因子, 【世代の継承】因子には有意差があり ($p < 0.05$), きょうだい(弟・妹)がいる人の方が高い得点を示していた。

3.5 教育の記憶ときょうだいの有無との関連(χ^2 検定)(表9)

教育の記憶ときょうだいの有無を χ^2 検定した結果, 「親になることについて」に関連した授業が心に残っている ($n=121$) の回答において, 「きょうだい(弟・妹)はいる」は, はい26名(21.5%), いいえ19名(15.7%), 「きょうだい(弟・妹)はいない」は, はい(60名(49.6%)), いいえ16名(13.2%)と, きょうだい(弟・妹)の有無によって回答の比率に

表5 親準備性の因子分析(最尤法・プロマックス回転)($n=190$)

	F1	F2	F3	F4	F5
F1: 親になることの意義 ($\alpha = .951$)					
自分自身も成長する機会	.893	-.083	-.069	-.092	.147
生き甲斐を得ること	.853	-.021	.040	.080	-.116
かけがえのない喜び	.830	.056	-.009	.126	-.183
人生が豊かになる	.828	-.053	.022	.008	-.019
子どもの成長を楽しみ、幸せを感じる	.801	.106	-.004	.088	-.174
自分の親への感謝の気持ち生まれる	.794	-.010	-.162	-.137	.095
価値ある立派なこと	.786	-.044	.044	-.105	.113
楽しいこと	.765	.007	.133	.015	-.013
自分の学習の機会	.747	-.110	-.006	-.028	.090
幸せなこと	.743	.048	.152	.023	.021
家族が増えること	.701	.101	-.130	-.045	.087
自分のことを必要とする人ができるということ	.666	.101	-.060	.038	-.002
F2: 乳児・育児への好意感情 ($\alpha = .935$)					
赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好き	-.111	.952	-.050	-.051	.002
赤ちゃんの世話をすることが好き	-.080	.923	.013	.039	-.002
赤ちゃんが好き	.014	.918	-.041	.014	-.035
赤ちゃんを抱いてみたいと思う	-.019	.837	.033	-.132	.046
赤ちゃんをみるとあやしたり笑いかけたりする	.095	.788	-.106	-.095	.085
赤ちゃんを「かわいいな」と思う	.243	.648	-.099	-.052	.002
自分も育児をやってみたいと思う	.152	.547	.238	.129	-.037
将来、育児をすることが楽しみだ	.133	.518	.173	.182	.013
F3: 親になることへの負担感・不安感 ($\alpha = .839$)					
心身の実質的負担を被る	-.083	.030	.820	.024	.043
自由が制限される	.010	-.068	.770	-.068	.074
時間的制約が生じる	.007	-.035	.748	-.078	.062
漠然とした不安を感じる	.014	.023	.648	-.032	-.094
F4: 親になることへの要件 ($\alpha = .868$)					
常識をもち、世間を知ることが必要	-.018	-.006	-.025	.869	.026
子育てについて学んでいく姿勢が必要	-.088	-.020	-.129	.791	.166
優しさや気づかいがある	.059	-.089	-.005	.789	-.076
F5: 世代の継承 ($\alpha = .862$)					
自分の子孫を残すこと	.010	-.034	.114	-.027	.856
次世代の担い手の育成	-.030	.115	-.060	-.005	.806
自分が受けた命をつなぐこと	.105	.019	.022	.228	.671
因子寄与率	40.080	9.584	7.170	5.753	3.438
全体の α 係数=0.940					

表6 親準備性を育む要因と親準備性の各因子の因子得点との関連

親準備性を育む要因	因子	はい			いいえ			t 値	検定
		n	M	(SD)	n	M	(SD)		
自分の親に対するイメージは良い	親になることの意義		0.05	(0.86)		-0.75	(1.74)	1.82	†
	乳児・育児への好意感情		0.02	(0.90)		-0.48	(1.53)	1.29	n. s.
	親になることへの負担感・不安感	160	0.03	(0.86)	16	-0.53	(1.09)	2.41	*
	親になることへの要件		0.01	(0.89)		0.01	(1.03)	-0.11	n. s.
	世代の継承		0.02	(0.91)		-0.16	(1.21)	0.70	n. s.
今まで乳幼児とふれ合う機会があった (授業等も含む)	親になることの意義		0.06	(0.94)		-0.52	(1.16)	2.78	**
	乳児・育児への好意感情		0.07	(0.92)		-0.60	(1.17)	3.24	**
	親になることへの負担感・不安感	151	0.01	(0.88)	25	-0.23	(0.98)	1.25	n. s.
	親になることへの要件		0.06	(0.90)		-0.31	(0.89)	1.94	†
	世代の継承		0.04	(0.90)		-0.22	(0.92)	1.26	n. s.
自分はやさしい、あるいはやさしくありたい	親になることの意義		0.03	(0.93)		-0.94	(1.58)	1.83	n. s.
	乳児・育児への好意感情		0.03	(0.93)		-1.14	(1.37)	3.60	**
	親になることへの負担感・不安感	166	-0.01	(0.89)	9	-0.38	(0.87)	1.22	n. s.
	親になることへの要件		0.02	(0.91)		-0.15	(0.77)	0.54	n. s.
	世代の継承		0.01	(0.94)		-0.13	(1.01)	0.42	n. s.
恋愛経験がある	親になることの意義		0.07	(1.00)		-0.26	(0.94)	1.90	†
	乳児・育児への好意感情		0.05	(1.02)		-0.23	(0.85)	1.68	†
	親になることへの負担感・不安感	130	0.04	(0.93)	46	-0.22	(0.76)	1.87	†
	親になることへの要件		0.11	(0.86)		-0.26	(0.96)	2.26	*
	世代の継承		0.06	(0.96)		-0.16	(0.85)	1.33	n. s.
家族との信頼関係が形成されている	親になることの意義		0.02	(0.98)		-0.53	(1.01)	1.79	†
	乳児・育児への好意感情		-0.13	(0.99)		-0.17	(0.95)	0.52	n. s.
	親になることへの負担感・不安感	165	-0.02	(0.89)	11	-0.14	(1.06)	0.43	n. s.
	親になることへの要件		0.02	(0.88)		-0.21	(1.21)	0.84	n. s.
	世代の継承		-0.13	(0.96)		0.20	(0.83)	-0.73	n. s.
「親になること」の価値を考えることがある	親になることの意義		0.08	(0.97)		-0.34	(0.10)	2.47	*
	乳児・育児への好意感情		0.10	(0.94)		-0.40	(1.04)	2.92	**
	親になることへの負担感・不安感	134	0.07	(0.89)	42	-0.33	(0.84)	2.61	**
	親になることへの要件		0.02	(0.94)		-0.02	(0.79)	0.27	n. s.
	世代の継承		0.07	(0.89)		-0.23	(1.06)	1.81	†
「親になること」の負担を考えることがある	親になることの意義		0.01	(1.00)		-0.22	(0.95)	1.08	n. s.
	乳児・育児への好意感情		-0.03	(0.99)		-0.01	(0.95)	-0.07	n. s.
	親になることへの負担感・不安感	152	-0.07	(0.87)	24	0.29	(0.99)	-1.89	†
	親になることへの要件		0.01	(0.91)		0.00	(0.90)	0.05	n. s.
	世代の継承		-0.01	(0.94)		0.06	(0.93)	-0.31	n. s.
子どもに対して肯定的な感情がある	親になることの意義		0.06	(0.85)		-1.57	(2.06)	2.22	†
	乳児・育児への好意感情		0.03	(0.90)		-1.21	(1.75)	1.99	†
	親になることへの負担感・不安感	168	0.01	(0.89)	8	-0.75	(0.79)	2.38	*
	親になることへの要件		0.03	(0.90)		-0.33	(0.91)	1.11	n. s.
	世代の継承		0.05	(0.90)		-1.02	(1.20)	3.24	*
子どもに対して否定的な感情がある	親になることの意義		-0.44	(1.19)		0.18	(0.81)	-3.56	**
	乳児・育児への好意感情		-0.48	(1.11)		0.19	(0.83)	-4.45	**
	親になることへの負担感・不安感	57	-0.49	(0.82)	118	0.19	(0.84)	-5.02	**
	親になることへの要件		-0.12	(0.85)		0.07	(0.93)	-1.25	n. s.
	世代の継承		-0.31	(1.04)		0.15	(0.85)	-3.11	**
自分が子育てをすることを考えたことがある	親になることの意義		0.13	(0.91)		-0.52	(1.10)	3.42	**
	乳児・育児への好意感情		0.15	(0.90)		-0.61	(1.03)	4.55	**
	親になることへの負担感・不安感	136	0.04	(0.91)	40	-0.23	(0.80)	1.67	†
	親になることへの要件		0.07	(0.91)		-0.18	(0.84)	1.53	n. s.
	世代の継承		0.05	(0.93)		-0.16	(0.97)	1.20	n. s.
自分には母性や父性があると思う	親になることの意義		0.18	(0.79)		-0.66	(1.29)	3.95	**
	乳児・育児への好意感情		0.20	(0.82)		-0.77	(1.10)	6.12	**
	親になることへの負担感・不安感	135	0.11	(0.89)	41	-0.47	(0.77)	3.81	**
	親になることへの要件		0.08	(0.88)		-0.23	(0.95)	1.98	*
	世代の継承		0.07	(0.88)		-0.24	(1.09)	1.87	†

†:p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 n. s.:not significant

表7 教育の記憶と親準備性の各因子の因子得点との関連

教育の記憶	因子	はい			いいえ			t値	検定
		n	M	(SD)	n	M	(SD)		
心に残っている	親になることの意義		0.27	(0.72)		-0.55	(1.00)	4.15	**
	乳児・育児への好意感情		0.17	(0.86)		-0.32	(0.85)	2.76	**
	親になることへの負担感・不安感	84	0.04	(0.91)	31	-0.17	(0.87)	1.14	n. s.
	親になることへの要件		0.09	(1.01)		-0.25	(1.00)	1.62	n. s.
	世代の継承		-0.02	(0.95)		0.12	(0.81)	-0.73	n. s.
役に立ったと思う	親になることの意義		0.15	(0.86)		-0.50	(0.84)	2.81	**
	乳児・育児への好意感情		0.13	(0.85)		-0.49	(0.92)	2.64	**
	親になることへの負担感・不安感	98	0.00	(0.89)	16	-0.02	(0.97)	0.06	n. s.
	親になることへの要件		0.03	(1.03)		-0.12	(0.94)	0.53	n. s.
	世代の継承		0.03	(0.92)		0.03	(0.92)	0.00	n. s.

†:p<0.1 **:p<0.05 ***:p<0.01 n. s.:not significant

表8 きょうだいの有無と親準備性の各因子の因子得点との関連

きょうだいの有無	因子	いる			いない			t値	検定
		n	M	(SD)	n	M	(SD)		
きょうだい(兄・姉)の有無	親になることの意義		-0.19	(1.15)		0.15	(0.80)	-2.26	**
	乳児・育児への好意感情		-0.16	(1.07)		0.12	(0.88)	-1.89	†
	親になることへの負担感・不安感	79	-0.05	(0.65)	101	0.04	(0.90)	-0.59	n. s.
	親になることへの要件		-0.13	(1.13)		0.10	(0.76)	-1.59	n. s.
	世代の継承		-0.11	(1.03)		0.08	(0.86)	-1.37	n. s.
きょうだい(弟・妹)の有無	親になることの意義		0.19	(0.78)		-0.24	(1.16)	2.82	**
	乳児・育児への好意感情		0.22	(0.81)		-0.29	(1.10)	3.45	**
	親になることへの負担感・不安感	102	0.78	(0.90)	78	-0.10	(0.94)	1.30	n. s.
	親になることへの要件		0.05	(1.02)		-0.07	(0.85)	0.84	n. s.
	世代の継承		0.14	(0.93)		-0.19	(0.93)	2.37	*

†:p<0.1 **:p<0.05 ***:p<0.01 n. s.:not significant

表9 教育の記憶ときょうだいの有無との関連

教育の有無	きょうだいの有無	n	人(%)		検定
			はい	いいえ	
心に残っている	(きょうだい) いる	121	55 (45.5)	17 (14.0)	n. s.
	(きょうだい) いない		31 (25.6)	18 (14.9)	
役に立ったと思う	(きょうだい) いる	119	60 (50.4)	11 (9.2)	n. s.
	(きょうだい) いない		42 (35.8)	6 (5.0)	
心に残っている	(きょうだい) いる	121	26 (21.5)	19 (15.7)	*
	(きょうだい) いない		60 (49.6)	16 (13.2)	
役に立ったと思う	(きょうだい) いる	119	35 (29.4)	9 (7.6)	n. s.
	(きょうだい) いない		67 (56.3)	8 (6.7)	

χ²検定 *p<0.05 n. s.:not significant

有意差は認められた (p<0.05).

4. 考察

4.1 親準備性の各因子について

親準備性について因子分析をした結果、【親になることの意義】【乳児・育児への好意感情】【親になることへの負担感・不安感】【親になることへの要件】【世代の継承】という5因子30項目が得られ、それらを親準備性の構成要素と考えた。因子分析の過程の中で佐々木⁸⁾の親準備性尺度の『育児への積極

性』の質問内容が多く除外され、[自分も育児をやってみたいと思う][将来、育児をすることが楽しみだ]の2項目のみが【乳児・育児への好意感情】の中に含まれた。エリクソン¹⁷⁾によれば、青年期の発達課題は自我同一性 (ego identity) をいかに確立していくかということにある。本研究の対象者は、医療福祉系大学の入学早期の学生であり、将来に対してより具体的な目標を持ち、職業に対しての同一性を獲得する時期であることが考えられる。本来育児のような人の世話をするという発達課題は青年期の

後の成人期の時期とされていることから、結婚や出産・育児に対しての積極的な興味・関心はなく、親準備性の構成要素に含まれなかったと考えられる。

4.2 親準備性を育む要因と親準備性の各因子との関連

4.2.1 親準備性を育む要因11項目について

親準備性を育む要因11項目に対して、本研究対象の7~8割の人は肯定的な回答をしていた。先行研究において赤松ら¹⁶⁾は、資格取得を目指す大学1~4年生を対象として母性や父性について調査した結果、母性度父性度共に高い群は全体の30%であったと報告している。また、服部と後藤¹⁴⁾は保健科学部の大学1年生を対象として恋愛経験の有無について尋ねた結果、恋愛経験がある人は全体の6割であったと報告している。本研究は、医学・社会・文化の統合的視点から人を理解することを志し、将来的に人と関わる職業を選択するであろう医療福祉学を学ぶ学生を対象にしていることから、親準備性を育む要因を持ち合わせている集団であったと考える。

4.2.2 親準備性を育む要因11項目と親準備性の各因子との関連

親準備性を育む11項目と親準備性の構成要素には関連が認められ、先行研究同様に、親準備性を高める要因になることが考えられた。その中でも、自分には母性や父性があると回答した人は、親準備性が高く備わっていることが明らかとなった。羽田野と門脇¹⁰⁾は男女共に母性への志向性が親準備性の獲得につながり、男子学生の場合はさらに父性への志向性が影響すると述べている。また、ふれあい体験、および恋愛経験があると回答した人も、親準備性が高いことが明らかとなった。宮良と神徳¹²⁾は「子どもとの接触体験が多い学生は養育役割の準備性が高い傾向にあり、子どもへの肯定的な感情を表出しやすく、親になるイメージが明確である傾向にある。一方で子どもとの接触経験の少ない学生は養育役割の準備性が低い傾向にあり、子どもへの関心も低くなりがちである」と述べている。そして2015年の調査¹⁸⁾では、18~34歳の独身者5276人の内、男性の69.8%、女性の59.1%は交際相手がおらず、このうち男女とも約3割は「交際を望んでいない」と回答しており、若者の恋愛離れが深刻化している。服部ら¹⁴⁾は恋愛を経験することは、より生き方、中でも結婚や子育てなどのライフイベントへの具体的イメージが高まる可能性があるとして述べている。

以上のことより、本研究においても「母性や父性」および、「恋愛体験」、「ふれ合い体験」があることは、親準備性を育む要因として重要であり、親準備性の

構成要素1つ1つに働きかける要因となっていることが示唆された。

4.2.3 教育の記憶と親準備性の各因子との関連

教育の記憶について、「親になることについて」に関連した授業が心に残っている・役に立ったと思っている人は、親準備性が高いことが明らかとなった。具体的な授業内容の自由記述として最も多かったのは、家庭科でのふれあい体験や保健体育の性教育、道徳(人の気持ちを知る)や特別教育活動(性について等の講演)の回答であった。現在、乳幼児や妊婦とのふれ合い体験は中学校で家庭科の授業の一環として実施されている。本研究が入学早期の学部1年生を対象にしたことから、大学入学前までの教育は親準備性を育む要因に十分なり得ること、またその時期の親準備性の教育が重要だと考える。親準備性は、欧米においてかなり以前から青年期(10代)を対象としたペアレンティング(親になること)プログラムとして開発されている。プログラムの一つには幼児期を対象にしているものもある。わが国の親になるための教育においては中・高校生を対象とされているが、その下の年齢からの資質の育成という視点はない¹⁹⁾。また、親準備性はあくまでも「子どもの発達にとっての親としての資質」であるために、現在の社会や家族の変動に対応した教育課題を提示するには至っていない²⁰⁾。このことより、日本の学校でも、中・高校生の家庭科のふれあい体験や保健体育にとどまらず、それ以前の世代を対象としたふれあい体験など、親準備性を育む様々な支援を行い積極的にアプローチしていくことが必要と考える。

4.2.4 きょうだいの有無と親準備性の各因子との関連および教育の記憶について

きょうだいの有無と親準備性の構成要素との関連として、弟や妹がいる人は、親準備性が高いことが明らかとなった。清水²¹⁾は弟や妹の誕生は長子にその役割を強く意識させ、兄や姉は弟や妹に対して保護者のように振る舞ったり、モデルとなったりすると述べている。弟や妹がいる人は、親になることへの意味を見出し、乳児・育児へのポジティブな好意感情を持ち、将来、自分の子孫を残すことを意識して成長していくことから親準備性が高くなっていると考えられる。教育の記憶については、弟や妹がいない人は、「親になることについて」に関連した授業は心に残っていた。弟や妹がいない人は、自分より下の子が育つ過程を見たことがない。新しい物事への関心から学習意欲がわき、家庭科のふれあい体験や保健体育の性教育が印象深く心に残っているのではないかと考えられる。

きょうだいの有無は親準備性を育む要因に深く関連していることが推察されたことから、きょうだいを持つことは重要であると考え、実際に一人の女性が一生の間に産む子どもの数（合計特殊出生率²²⁾は、やや上昇はしたものの2013年には1.43であった。少子化の背景には女性の社会進出に伴う晩婚化や晩産化など様々な要因が関連しているが、もう1つの要因として末永ら²³⁾は、辛い妊娠・分娩の体験は2～3年経過しても母親に心理的な影響を及ぼし、次子出産の意思決定に影響する要因の一つになり得ると述べている。その中でも母親の出産体験として、「孤独なお産」「医療者への不満・配慮のなさ」などは鮮明に記憶されていた。医療者一人一人が母親に寄り添い、第1子の妊娠・分娩体験を肯定的に捉えることができるよう援助することは、母親の次子出産が望め、きょうだいのある人達が増えていくことにつながり非常に重要であると考え、

5. 研究の限界と今後の課題

本研究は、一大学の医療福祉系大学1年生の男女を対象としたこと、および回収の結果において女性が多くを占める偏りのある集団であったことから、男女の比較は難しく、また、今回の結果を一般化するには限界がある。今後は対象を広げた上で調査す

ることが必要と考える。

6. 結論

親準備性の教育を受けてきた青年期大学生の親準備性の現状とそれを育む要因として、以下の3点が明らかとなった。

- (1) 親準備性の構成要素として、【親になることの意義】【乳児・育児への好意感情】【親になることへの負担感・不安感】【親になることへの要件】【世代の継承】の5因子が抽出された。
- (2) 親準備性を育む要因11項目および教育の記憶やきょうだいの有無は、親準備性構成要素の1～5因子の得点において有意差や有意差傾向が認められた。
- (3) 教育の記憶の有無はきょうだいの有無との間で有意差が認められ、弟や妹がいない人の方が教育の記憶が心に残っていた。

以上のことより、親準備性教育を実施すること、およびきょうだいの有無が親準備性を育む要因として重要であることが示唆された。

本研究は川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科保健看護学専攻修士論文の内容を加筆・修正したものである。

文 献

- 1) 戸田まり：親になる準備。詫摩武俊編，出会いと関係の心理学，新曜社，東京，59-63，1992。
- 2) 井上義朗，深谷和子：青年の親準備性をめぐって。周産期医学，13(12)，2249-2252，1983。
- 3) 岩田崇，秋山泰子，井上義朗，深谷和子：青年期の親準備性に関する研究。
<http://www.niph.go.jp/wadai/mhlw/1982/s5706093.pdf>, [2015]。(2015.10.19確認)
- 4) 文部科学省：学習指導要領。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youryou/main4_a2.htm [1998]。(2015.7.9確認)
- 5) 白井由貴子，岡田みゆき，小川育子：高等学校普通教科「家庭」に対する高校生の意識。香川大学教育実践総合研究，7，49-56，2003。
- 6) 伊藤葉子：中・高校生の性役割観と親性準備性との関連性の検討。家庭教育研究所紀要，(18) 16-23，2006。
- 7) 国際教育協力懇談会資料集：我が国の家庭科教育の経験と特徴。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/002/shiryou/020801d.htm#2, [2002]。(2015.7.9確認)
- 8) 佐々木綾子：親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討。福井大学医学部研究雑誌，8(1-2)，41-50，2007。
- 9) 服部律子：親準備性尺度作成のための因子抽出の試み。思春期学，26(4)，428-432，2008。
- 10) 羽田野花美，門脇千恵：青年期男女の親性準備性および関連要因—日本看護学会論文集—。母性看護，(35)，140-142，2004。
- 11) 岡本裕子，古賀真紀子：青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析。広島大学心理学研究，(4)，159-172，2004。
- 12) 宮良淳子，神徳規子：小児看護学学習前の学生が持つ対児感情と親性準備性。中京学院大学看護学部紀要，3(1)，29-41，2013。
- 13) 中村翔，田原歩美：次世代子育てに向けた親準備性概念の捉え直し—親準備性の世代間比較を通して—。福山大学こころの健康相談室紀要，(6)，27-34，2012。
- 14) 服部律子，後藤宗理：青年期女子のライフデザインと親準備性。椋山女学園大学看護学研究，7，41-49，2015。

- 15) 笠浪欣子, 四宮美佐恵: 成人期男女の親準備性の現状. 看護・保健科学研究誌, 11(1), 205-213, 2011.
- 16) 赤松恵美, 四宮美佐恵, 佐藤静代: 親性準備性と母性度・父性度の発達に関する調査—大学生を対象に—. インターナショナル Nursing Care Research, 3(1), 49-59, 2004.
- 17) E. H. エリクソン著, 西平直翻訳: アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房, 東京, 2011.
- 18) 国立社会保障・人口問題研究所: 第15回出生動向基本調査.
http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_gaiyou2.pdf, [2016]. (2016.12.2確認)
- 19) 伊藤葉子: アメリカの中・高校生を対象としたペアレンティングプログラムの検討. 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 145-151, 2007.
- 20) 後藤さゆり, 奥田雄一郎, 平岡さつき, 呉宣児, 大森昭生, 前田由美子: 青年期における「親になること」の教育的意義の検討. 共愛学園前橋国際大学論集, 10, 207-218, 2010.
- 21) 清水弘司: 出生順位は性格にどう影響するか. 真仁田昭編, きょうだいの上手な育て方—上の子・下の子・ひとりっ子のよさを生かす—, 金子書房, 東京, 23-30, 2001.
- 22) 内閣府: 少子化の現状.
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2015/27webgaiyoh/html>, [2015]. (2016.12.2確認)
- 23) 末永芳子, 嶋松陽子, 本田千浪: 出産体験の心理的影響. 保健看護学研究誌, 2, 51-58, 2005.

(平成29年4月27日受理)

Factors Promoting University Students' Parenting Preparedness During Young Adulthood

Yukiko MIZUGUCHI, Mihoko NAKANII and Shinji INOUE

(Accepted Apr. 27, 2017)

Key words : parenting preparedness, adolescence, education

Abstract

To clarify the status and factors promoting university students' parenting preparedness during young adulthood, a mail-based questionnaire survey was conducted between April and June 2016, on 816 male and female students in their first year at a university specializing in healthcare and welfare. Responses were obtained from 190. 1) There were 5 components of parenting preparedness: <the importance of parenting>, <affirmative emotions toward infants and childcare>, <a sense of burden and anxiety over parenting>, <requirements of parenting>, and <continuation of generations>; 2) memories of education and the presence of siblings as factors promoting parenting preparedness showed significant differences ($p<0.05$) or a tendency toward them ($p<0.1$) in scores for the 5 above-listed components; and 3) there were significant differences in memories of education between the students with and without younger siblings ($p<0.05$), as the memories were more persistent in the latter. Based on the results, the provision of education for parenting preparedness and presence of siblings may be factors promoting such preparedness.

Correspondence to : Yukiko MIZUGUCHI

Masters Program in Nursing
Graduate School of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Saidaijinakal-9-24, Higashiku,
Okayama, 704-8116, Japan
E-mail : chocco_5@yahoo.co.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.27, No.1, 2017 63–73)

